

近衛ヲ二師団通信隊部隊略歴

近衛ヲ二師団通信隊長 道本忠雄

年月日						概略
昭和	二	面	三	七	五	近江混成旅団通信隊編成完結
五	一	〇	四	天	宇呂若出発	
五	一	〇	五	五	南支(黄村)到着	
五	二	一	五	五	翁英作戦参加	
五	三	一	五	五	南寧—賓陽に於て賓陽作戦参加	
五	四	三	五	五	江南作戦参加	
五	五	六	五	五	才二次西路作戦参加	
五	六	五	五	五	近江師団通信隊編成完結	
五	七	五	五	五	仏印追討作戦参加	

至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	昭	年月日	概	要
一五 一三 三五	一 一 三	五 二 五	一 二 五	一 八 五	一 五 七	一 三 九	一 二 面	五 二 九		廣東省中山県二戰追	
										欽寧撤去作戰參加	
										近江師團通信隊編成改正完結	
										留州方面遮断作戰參加	
										東江作戰參加	
										西貢に上陸	
										南都仏印追撃作戰參加	
										泰國進入作戰參加	
										馬來作戰參加	
										昭南港出港	
										スマトラ撤定作戰參加	
										スマトラ島防犯	

年月日	概	要
至自 〇八四 〇八四 一	スマトラ島防犯	
〇一三	一名死亡	
〇三三	一名転出	
〇四〇	十五名転入	
〇六一	一名転出	
〇六六	一名死亡	
〇七六	一名転入、二名転出	
〇七三	四名転出	
〇八五	終戦、マタニシマンタルに矢刀集結未掌握者なし	
〇八八	四名転出、六名転入	
〇九三	七名島外移駐	
一三三	二十名転入	
一四三	七名内地還送	
二五二	二十名転出	
二五二	二名転出	

年月日	概 要
昭 三 五 五	一名内地還送
〃 五 五	三名内地帰還
三 〃 〃	一名転出
〃 六 〇	一名病死
二 七 五	四十名（入院患者三を含む）残置（残置隊伊藤大尉以下三七名 21、11、6、浦賀上陸）
二 七 五	ベラワン港出發
〃 〃 五	シンガポール上陸
三 七 五	シンガポール出發（後発者として五十一名残置）
〃 八 八	大竹老上陸（入院なし）
三 八 九	復員完結

近衛輜重兵ヲ二連隊部隊行動

近衛輜重兵ヲ二連隊長 岸上 又 由

年月日	概要
昭和 一五 七 三	支那広西省南寧に於て編成完結 尔後南寧周辺の警備並に南寧撤退作戦に参加
五 一 二	一、戦死 二名 二、戦病死 三名
五 八 二	支那広東省中山県に転進尔後同地周辺の警備に任ず
五 二 八	一、戦死 一名 二、戦病死 二名
五 二 八	仏印西貢に転進尔後同地の警備に任ず 泰國境通過北印中部馬來攻惠作戦 「シンガポール」攻略作戦に参加 一、同作戦に於て戦死四名

近衛ヲ二師団兵密勤務隊師隊略歴

年月日	概要
昭 五 六 三	軍令陸甲ヲ十号に依リ近衛師団編制勤務員完結
一 五	近衛師団兵密勤務隊勤務員完結
五 六 九	近歩一師団出動 東京港出帆
一 七 九	中支環國上陸
五 七 二	中支環國出帆
一 七 五	南支環國上陸 次後南寄國辺の警備
五 六 六	欽県撤退作戦参加の為欽県出帆
一 七 三	南支中山環國上陸 次後同中山環國警備
一 七 三	南支印進駐作戦参加の為唐家港出帆
一 八 二	南支印西貢に上陸 同地附近の警備
一 三 九	衆國進駐作戦参加の為印泰國境通過
一 一 八	馬六甲略作戦参加の為泰馬東國境通過
一 三 〇	「スマトラ」島勘定作戦参加の為昭南港出帆

近衛ヲ二師団ヲ四野戦病院部隊略歴

陸軍大医少佐 藤崎由文

年月日	概	要
昭 一 四 一 一 三	編成爾後南支・仏印・泰・マレー・スマトラに在りて病院開設 指揮隷属関係反復の要遷り概要	
西 一 一 三	近江混成旅団ヲ四野戦病院 編成完結	
一 五 八 三	近江師団ヲ四野戦病院 編成改正	
一 八 六 一	近江ヲ二師団ヲ四野戦病院 改 林	
	参加せる主要なる作戦	
	翁英作戦 賓陽作戦 江南作戦 仏印進駐作戦 マレー作戦 スマト ラ作戦	
	賓陽作戦ノ除敵襲に依り人員 戦死一名 負傷五名 馬匹五一頭 損 失せり	

16

外

年月日	
概要	維新紅生は南支に在りては一般に良好とはみ難きも其の他の地成は概ね良好なり 終戦より帰還迄の行動概要 終戦直後北アチエより東海岸州義園に集結病院業務農耕と更地中 一月は旬ガニ半卸を編成「カラシ」島に移駐病院開設せり 其の他卸隊の経歴中摘要と認むる事項なし

近衛ヲ二師団ヲ一野戰病院部隊略歴

宮ヲ三八二四部隊 陸軍中佐 増本 彦五郎

少佐 嶋原 若

年月日	概	要	編成地	駐留地
昭和 二 三	軍令陸甲ヲ三十八号ニ授リ近江混成旅団勅員下令		東京	東京
〃 〃 三	近江混成旅団ヲ一野戰病院 編成完結		東京	東京
〃 三 七	中野老出帆		山梨	山梨
〃 〃 五	南支那東省黃埔上陸		東京	東京
〃 五 一	広東省黃埔出帆		東京	東京
〃 〃 八	広東省蚊虫山上陸		東京	東京
〃 五 一	軍令陸甲ヲ十号ニ授リ近江師団臨時勅員編成改正下令		東京	東京
〃 五 八	近江師団ヲ一野戰病院改編完結		東京	東京
〃 五 二	広東省蚊虫山出帆		東京	東京

0087

[illegible]

0088

昭和 三 二 四 六 年 月 日 三 二 一 三	
編成年月日及表備考 近江混成旅団第一野戦病院編成完結 近江師団第一野戦病院改編完結 近江第二師団第一野戦病院改編 編成定員 二二八名（補綴二三 下士官三七 兵一六八） 兵器 小銃四三挺 乗用車一 自動車一九	浦賀老上陸 復元完結 機 要
	編成地 兵庫身地

年 月 日	至自 至自 至自 至自 天五 一五 一五 五五 七二 一二 二一 一三 三九 二八 五五 四五
概 要	衛生材料 病院医報二組 臥医報一、三男各一具 手術用天 第二具 衛生盥水器二具 野戰滅菌器手術燈 二具 患者用食器三具 患者用被服五〇〇人分 担架二〇具 休戦(警備)経過 箱受作戦参加(南支) 寶陽作戦参加(〃) (病院所設) 南寧固圉警備及南寧撤退作戦参加 中山警備(病院開設)
	死傷損耗 戦死 四 戦傷 五

年 月 日	概 要	
至自 二〇 一九 九三 至自 一五 三二 四一 至自 一五 三二 四一 至自 一五 三二 四一 至自 一五 三二 四一 至自 一五 三二 四一	南印仏印進駐作戦及警備（病院開設） 恭園進入作戦及警備（同右） 南印馬來攻略作戦に参加（同右） 新嘉坡攻略作戦に参加（同右） スマトラ作戦及警備防駐に参加 終戦業務及現地自任 終戦後の状況 スマトラ島東海岸州コタナラヒに於て終戦となり 昭二〇年八月三十一日、同三〇日 アヒンチンギ市板 附近に果樹の一部を以てコデビインチンギ市板	南印馬來の 収容者 一、二〇〇名

年 月 日	
概 要	「タンジョカソレ」今を開設 附近集結、部隊の患者 収療に任ずると共に、現地自給を實施す。同年十月 「ラチエ」甘「ロスマウエ」に今を開設 附近部隊 の同地附近撤退と同様に「バンカラ」ランカン に撤退 五月迄 同地に今を開設す 昭和二年師団の南島移駐開始と共に「ベラワ」に今 を開設し主力は五月中旬 師団のオーニ次「スマトラ 」撤退と同様に「タンジョカソレ」及び「デビインテン 」より「タン」ヲヨムラワレに移駐 病院を開設 患者の収容の及後送並現地自給を實施す 部隊の復員状況は昭和二年五月十九日 八月三十 四名を帰還し部隊主力は十一月帰還復員完結せり 一部十二名は十二月四日復員す 現在「スマトラ」 に残留せるものは作業隊要員紅生下士官三名 連合 軍の取調ベリ為 抑留中のもの主計下士官一名合計

年月日	
概 要	四名なり。 病院表以下一致団結。軍記。風紀厳正にして、勇隊 逃亡者なし。

近衛才二師団海上輸送隊

部隊略歴

年月日	概	要
昭二六 八 二 五	独五突才三十五連隊動員下令	
八 二 六	独五才三十五連隊動員完了	
八 二 七	京城出港	
八 二 八	釜山港出帆	
八 二 九	台湾高雄港寄港	
八 三 〇	出帆	
八 三 一	比律賓「ババ」港寄港	
八 三 二	出帆	
八 三 三	「セバ」港上陸	
八 三 四	軍令陸甲才一〇大馬に依り近江才二師団海上輸送編成下令	
八 三 五	近江才二師団海上輸送隊編成完了	

年月日	至自			至自			至自		
	二	三	三	五	五	五	五	五	五
	六	五	五	七	六	五	四	四	二
	三	八	五	二	九	一	三	九	九
概	比律賓「ピ」アレ島周辺に警備 「」「」老出帆 ハ印西貢老寄港 同 出帆 「シンガポール」老上陸 「シンガポール」固に警備並に舟艇整備 「」老出帆 「スマトラ」島「ベラワン」老上陸 「」老防犯 復員「」スマトラ「」島「ベラワン」港出帆 名目上陸								
要									

パレンバン防犯司令部部隊略歴

防犯司令官陸軍少将 中島 継三

年月日	概要
昭和八・三・五	軍令陸甲オ一八号に基く「パレンバン」防犯司令部の編成を完了し同所にてオ二十五軍司令官の隷下に入りしめらる「パレンバン」製油所の防犯に任ず
昭和八・一・七	左記の通防犯司令官更迭す 「パレンバン」防犯司令官 陸軍中將 西山 満太郎 補オ二十三師団長 「パレンバン」防犯司令部附陸軍少将 中島 継三 補「パレンバン」防犯司令官
昭和八・一・一〇	軍令陸甲オ一四号に基く防犯司令部の編成改正を完了し・同所オ二十五軍司令官の隷下を脱し新たにオ三航空軍司令官の同所オ九飛行師団長の隷下に入りしめられ「パレンバン」製油地帯の防犯を担任す と共に従来担任しありし「パレンバン」同所近地の防犯（防犯）を疎く

年 月 日	
概 要	任希王独五混成オニ十六旅団長に移譲す 829、約一ニ、三旅「パレンバン」に承譲せるも人員被害なし 英園東印度艦隊機動部隊の艦載機両日共、約百五十機 製油地帯に来襲せるも当司令部人員被害なし オ九飛行師団長の隷下を脱し新大にオ十五軍司令官の隷下に入らしめられ、主として南部「スマトラ」石油資源地帯の地上防空に任ぜると共に一部を以て「パレンバン」地区飛行場の地上防空に任じつつ終戦に至る

高射砲方百二連隊部隊略歴

-76-

年 月 日	
概 要	固有部隊名 協定番号二連隊 及通称号 富オ一〇三八八部隊 織成 連隊本部一高射砲中隊五照定中隊一 留守業務 高射砲オニ連隊補充隊 擔任部隊 （東部オ七十七部隊） 編成要員 野戦高射砲オ四十六隊の全カ 野戦高射砲オ三十四大隊の主力 高射砲オ十六連隊同オニニ連隊の一 爾後「ママトラ」高「パレンバン」精鋭隊の防空警備

高射砲才百三連隊部隊略歴

昭和二十一年六月十二日編成
 高射砲才百三連隊大隊
 固有名 高射砲才百三連隊
 通称号 雷才一〇三六九部隊
 現在位置 「スマトラ」島「パレンバン」

年月日	概要
昭 六 三 六	部隊編成人員の補充経歴の概要 高射砲才百三連隊を基幹とし野戦高射砲才三十四大隊の一ヶ中隊を編入して連隊本部二高射砲中隊五、砲台中隊二の編成にて編成を完了し「スマトラ」島「パレンバン」製油所の防空に任ず一部（砲台中隊一ヶ中隊）は当時蘭甸頭責に派遣しありて、連隊編成内にして蘭甸才十五軍司令官の指揮に入りしめり。 昭和十七年度現役矢一七名の現地入營及補充矢約三五〇名の補充を受けり。

年月日	
概要	八七 高射砲中隊一、照空ニケ中隊（但し照空中隊一は人員の補充ある迄は増加し編成改正を行う） 一二 照空要員とし約一〇〇名の補充を受け、同月欠中の照空一ケ中隊の編成を完結す 一八 昭和一八年度現役兵約二〇〇名現地入営す 九 補充兵約二〇〇名補充要員とし到着す 十 軍隊区分に基き臨時高射砲一ケ中隊を編成す。同日昭和十六年六月到着せる補充兵約一〇〇名を高射砲や百二連隊に転属す 八二 ホーインガ隊 約二十機が未襲に於ける対空戦斗、死傷なし 二 尔後同年永に於けるホーインガ隊軍機の数度に亘る偵察あり 二 同月永軍隊区分に基き臨時照空一ケ中隊を編成す 二 二回に亘り英軍艦載機百数十機未襲による対空戦斗 二 単死一（故障軍伍長 赤坂辰巳） 二 単傷一

0102

年 月 日	
概 要	二 八 五 二 八 五 十 八 九 八 二 八 大詔喚集 戦斗行動停止 高射砲が百一連隊より高射砲一ヶ中隊照座一ヶ中隊編入せらる 緬甸南貢に既属中のオ七中隊（照座中隊）は緬甸方面軍に転属せしめ らる 以降「パレンバン」に警備及終戦処理に任ず 迄入院患者とし約百五十名屢次に亘り復員す ハ六四名復員す 現在未復員者連隊長以下約六〇〇名に上り「パレンバン」にありて同 地の警備、終戦処理並連合軍の労務に服しあり

機関秘ヲ百一大隊部隊略歴

陸軍少佐 鈴木 勇

年月日	概	要
昭和六十九年三月	編成完結（於野戦重砲隊オ一七連隊補充隊）	
三月五日	南方派遣のため一部（ケ中隊）内地出発同年十一月一日	スマトラ島パレンバン上陸
三月五日	主力内地出発 同年十二月二日	パレンバン上陸 中地区の防室に従事
三月五日	オニナ五連の隷下に入る	
三月五日	パレンバンに防犯司令の隷下に入り	スマトラ島防犯に従事
三月五日	コタバミに附近の警備に従事	
三月五日	南スマトラに燃料工廠長の指揮下に入り	精油所の警備に従事
三月五日	右指揮下を脱し	パレンバンに防犯司令に復帰
三月五日	パレンバンに防犯司令に復帰	パレンバンの警備に従事す
三月五日	一部帰還命令に依り	バダスクニンに乗船完了 翌二十五日一大隊

昭 三 九 二	九月十日大竹に上陸 復員完行陳隊召集解散 備考 部隊長（主力）現地残留のため不確実なり
------------------	---

0105

パレンバン防紅通信隊部隊略歴

「パレンバン」防紅隊
「パレンバン」防紅通信隊

部隊長 吉村 八郎

年月日	概 要
昭和五一年一月二	編成完結日及び編成地 佐賀県佐賀市
五一年一月二	編成より終戦迄の経過の概要 、門司港出港
二月八	「スマトラ」島「パレンバン」上陸
二月八	以降「パレンバン」製油地帯の防紅通信に任ず
	参加せる主要作戦 「スマトラ」島の防紅

年 月 日	概	要
歴代部隊長名 陸軍大尉 吉 和 八 郎 部隊長精通者 [Redacted] 陸軍大尉 山口 鑑次郎 [Redacted] 陸軍大尉 藤 山 政 人		

特設才五機関砲隊部隊略歴

編成下令年月日

昭和一九年八月一日

編成擔任部隊

野戦重砲隊才十八聯隊

補充隊

編成完結日

昭和一九年九月一九日

年月日	概要
昭和一九年九月二〇	歩兵才百十五聯隊補充隊附陸軍少尉村井田朗特設機関砲隊長暫員として野戦重砲隊才十八聯隊補充隊に転属。同日特設才五十八機関砲隊長命課機関砲才一大隊附陸軍佐長笠原政司以下廿三名転属編入 砲才一聯隊より陸軍上尉矢辻与雄外二名転属編入 独立工兵才二十五聯隊より陸軍兵長笠原政司以下廿三名転属編入 陸軍准尉井下田五三郎以下五十五名補給召募に依り転属編入 編成擔任部隊長ノ筆致校査終了編成完結。編成表別紙才一ウ如し 在戦地出発

年月日	統	要
昭 二 九 九 三	内司港駛到着	内司港出帆 内地港港出港時を以てオミ船定車の積下に入る
シ 九 三	昭南港寄港	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 三 五	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 七	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 一	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
シ 二	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る
五 三	昭南港出帆	オミ船行師団長の積下に入る

年月日	概 要
昭 三 一	陸軍上着矢 鈴木敬夫以下大名無縁通信教育終了 帰隊くらマツト通 信所開設「パレンバン」レと通信開始
五 五	オ三船船輸送司令部「スマトラ」支那の命に押り特設オ六十二機隊死 隊転進に伴ひ「ドアブラ」スレ地区防空任務を継承し陸軍暫立花一丈以 下四ヶ分隊を同地区に転進せしめると共に六十二機隊残隊残置隊一四 ヶ分隊を併ひ指揮す
七 五	オ九飛行師団の隷下を脱し「パレンバン」防衛司令部の隷下に入る
七 五	次期作戦準備の爲に「ドアブラ」スレ陣地に増派し指揮官として 陸軍中尉井田五三郎を任命
四 四	終戦の大詔嘆せらる
八 三	任陸軍中尉 村井田爾
八 三	オ二十五軍司令部より陸軍少尉中村秀男転属編入
八 三	「クラマツト」並に「ドアブラ」スレ出発
八 三	「パレンバン」到着

年月日	概	要
昭和九年三月	「パレンバン」に出発同日「ランバン」州「コタバミ」到着同日より同地附近の治安警備に従事	
三月二十八	陸軍軍曹佐藤竹太郎以下二〇名「パレンバン」防犯司令部要員として派遣のため「コタバミ」に出発同日「タンジョン」に到着同日より任務に従事	
三月三十三	隊長以下「コタバミ」に出発「ランバン」州「レシオン」に到着同日より同地附近の治安警備に従事	
三月十九	陸軍軍曹佐藤竹太郎以下二〇名「パレンバン」防犯司令部要員を脱し帰隊	
三月十九	「ランバン」州「レシオン」に到着	
三月一	「パレンバン」に到着 同日より同地附近の治安警備に従事	
三月五	隊長以下五〇名「パレンバン」出帆	
三月六	「ランバン」上陸	
三月八	陸軍軍曹佐藤竹太郎以下二八名「パレンバン」出帆	
三月八	「ランバン」上陸	

...9-

0111

	年 月 日
三 五 元 ハラン島出版 名古屋港上臣	概 要

- 77 -

0112

特設才六十一機関砲隊部隊略歴

編成下令年月日

昭和一九年八月十日

(軍令陸甲才百〇九号及並才

二〇号に依り)

編成擔任部隊

舞鶴重砲兵連隊

編成擔任官

舞鶴重砲兵連隊長

編成完結日

昭和一九年九月一九日

編成当初部隊長

陸軍少尉 伊藤 甫

年月日	概	要
昭和九年七月	陸軍少尉伊藤甫歩兵才百五十一連隊補充隊より特設才六十一機関砲隊長充用として勇入歩兵才百三十一連隊補充隊附野倉弘の以下八名・野	
昭和九年九月	属編入 陸軍准尉本條栄三即以下七十三名臨時召集に依り応召編入	
昭和九年九月	機関砲才十二大隊より陸軍歩兵長 竹内大吉以下四名・専属編入編成完結	
昭和九年九月	軍裝検査並に出陣式	

0113

年月日	概	要
昭五九九二	舞鶴出港	
九九二	内司港出港 内地港為出港時を以てオミ航空軍の隷下に入る	
九〇二	昭南老奇老	
九〇五	オ九飛行師団長の隷下に入る	
九〇八	昭南老出帆	
九一〇	ヌマトラ島 パレンバン到着	
九二二	パレンバン出港・パレンバン州スンガン着 オミ艦船輸送司令部 スマ トラ支部の指揮下に入りマコムシレ洞撤油水路の防空警備に従事す	
九二五	陸軍佐長 杉山武夫以下六名、無線修築要員として三船す、支水路防 防往通艦隊に派遣	
九四一	三船す支命令に依り対岸オ十七号監視所陣地に陸軍中尉・本藤栄三郎 以下二十三名を分駐せしむ	
九五	オ九飛行師団長の隷下を脱し、パレンバンに防往司令部の隷下に入る	
九六	終戦の大詔煥然せり	
九八	任陸軍中尉 伊藤南	

年月日	概略
昭和二十八年八月三	昭和二十八年八月二十日附を以てオニ十五軍司令より陸軍少尉 伊藤省三、特設オ六十一校閲砲隊附に専属編入
ハニ	マンガン出産
リニ	パレンバン到着
九三	パレンバン出産、ランポン州コタバミ到着、同地区にてスマトラ島防犯のための治安警備に従事す
二八	陸軍中尉 伊藤省以下へ主カニ五十二名ランポン州・タンパヨカラントパレンバンに防犯司令即要員として派遣のため、コタバミ出産
三二	タンジョンカラント到着任務に従事す
三三	コタバミ残置隊陸軍軍曹八木静保以下二十八名コタバミ出産、ランポン出産
三九	ランポン州レジョガリ地区到着、同地区の治安警備に従事す
二一	一パレンバンに防犯司令即要員を脱しタンジョンカラント出産、レジョガリ地区到着残置隊に復帰す レジョガリ地区出産

昭 ニ	一	五
パレンバン州アラマリ到着	プラブマリ出発・パレンバン州アンドツホ到着	同地の油田施設地区の治安警備に従事
任務終了に付きアンドツホ出発	パレンバン到着	パレンバン出発
ガラン島到着	ガラン島出帆	名古屋若上陸
後員見送る具解陳		

0116

独立親成オニ十五旅団司令部
部隊略歴

年月日	概要
昭 八 二 一 天	軍令陸甲オ百ノ号並に陸亜板密オ四百五十号に依り独立親成オニ十五旅団臨時編成並にオニ十五独立守備隊復帰下令 同部隊並にを以て独立親成オニ十五旅団の編成(編成擔任官陸軍少將 谷藪卯華雄)に着手せり 編成部隊並に編成地 独立親成オニ十五旅団司令部 「スマトラ」島「タバヌリ」州「シボルカ」 独立歩兵オ百四十二大隊 「スマトラ」島「アサエ」分州「シナウエル」島 独立歩兵オ百十三大隊 「スマトラ」島「アサエ」州「ビールン」

年 月 日	概 要
独立歩兵才百四十四大隊 「スマトラ島」タパスリレ分州「ニアス」島 独立歩兵才百四十五大隊 「同」 独立親成才二十五旅団砲兵隊 馬來半島 昭南 独立親成才二十五旅団工兵隊 「スマトラ」島「タパマリ」州「シボルカ」 独立親成才二十五旅団通信隊 「スマトラ」島「タパマリ」州「シボルカ」 旅団長 陸軍少将 谷 叔 那華雄（ニ九期） 編成完結 昭和一九年一月八日	

年 月 日	昭 五 一 五 二 六
概 要	任務隊の行動着 「スマトラ」島に防犯に任じ「タバタリ」州及「アチエ州」の一部を 委任す 「独立歩兵第一四三大隊」が「シボル」がレに直進す 「シボル」がレ沖に於ける敵潜水艦との戦闘 昭和一九年二月六日 近海連絡輸送に従事せる「タバタリ」がレ 船（百噸） 砕け浅航「シボル」がレ退出帆「ニアス」島に向う 「シボル」がレ沖約十五軒航行中 突如敵潜水艦浮上砲撃を雨降せ るを以て直ちに輸送指揮官 旅団砲兵隊長高野少佐に命じ依り 之と砲撃戦をせしむ「タバタリ」がレは沈没せり 本軍團に於ける戦死者左記に如し 左 記 独立歩兵第一四三大隊 陸軍上着兵 通 隊 宗 一 同 一四四 付 陸軍大尉 高 橋 嘉 三

年月日	
機要	独立歩兵第一四四大隊付 陸軍兵長 藤原 春一 同 一四五 陸軍兵長 武川 英一郎 独立親衛隊第三旅団砲兵隊附陸軍少尉 柳子策 長 雄 敵潜水艦「シボル」が砲撃 シボルが港内に敵潜水艦着人浮上し 石油空「タンクレ」を砲撃す とも、旅団砲兵隊直方へ砲撃退す 敵潜水艦「シボル」が砲撃 昭和一九年 月 日「シボル」が港内に敵潜水艦着人浮上し、石 油空「タンクレ」を砲撃せしむる旅団砲兵隊直方へミを発見撃退す 「タンクレ」に於ける敵潜水艦と戦闘 「ニアス」が「タンクレ」に砲撃し港に敵潜水艦着入、旋回中の船 船に射し砲撃を施す、直ちに竹在艦隊部隊に砲撃退す 本戦闘間敵死傷左記如し 戦死 才十郎陸隊泉隊配属

年 月 日	概 要
昭 一 九 一 〇 一 四	海上輸送隊佐藤隊 陸軍中尉 野村 林 負傷 同 矢二名 旅團長 谷報少將 オニ十五 軍參謀長として旅団長として、陸 軍少將 尾本憲三 補登令せらる ハニ七期 泰國派遣軍司令部より赴任 独立歩兵オ一四ニ大隊 ヲシガルカレに転進す 旅團司令部 独立歩兵オ一四ニ大隊並に独立混成オニ十五 旅團砲兵隊 同通信隊西海岸州 ヲバガンレに転進 防犯地区を拡張す 独立歩兵オ一四ニ大隊は西海岸州 パリアマン附近に転進 同州北部 地区の防犯に任ず 独立混成オニ十五 旅團工兵隊 西海岸州 ヲバガンレに転進す 独立歩兵オ百四十二大隊は ヲパレンバン州に転進 オレ飛行集団長 の指揮下に入る 独立歩兵オ一四十四大隊主力は ヲシガルカレに転進 独立歩兵オ一四 ニ大隊の任務を継承す

年 日 日	概 要
陸 二 〇 八 五 二 一 三 九	停戦詔勅發布せらる 近江オニ師団海士輸送中隊の一ヶ小隊（北島隊）反能船工突カ七連隊 方一中隊の一ヶ小隊（中丸隊）当旅団に転属す 独立歩兵オ一四五大隊はツバキコンホレに独立混成オニ五旅団突隊は ツバトサシカハル。同工突隊はツバンキノンレに移駐す 旅団司令部ツソロリレに移駐 独立混成オニ五旅団砲兵隊 馬末に移駐 独立歩兵オ一四三大隊ツバキチンヤレに移駐 旅団司令バキチンヤレに移駐 独立歩兵オ一四四大隊 陸軍才尉 絹 川 太三郎 義勇軍大尉一名 義勇軍少尉一名 隊長 義勇軍オニ四中 小 同 隊

- 101 -

0123

年 月 日	昭 二 三
概 要	独立歩兵第一四三大隊は「バヤコンブレ」に同第一四五大隊付「バヤコンブレ」に移駐 独立歩兵第一四四大隊「バリンバル」に移駐 ガニ五軍司令部北部「スマトラ」に移駐に伴ひ旅団長は昭和二年四月一七日以降中部「スマトラ」所在ガニ五軍隷指揮下全部隊の指揮を命ぜらる 旅団司令部並に独立歩兵第一四五大隊は「バヤコンブレ」を同月下旬、独立歩兵第一四三大隊は「バヤコンブレ」を撤退、「バリンバル」に集結す 旅団は終戦後連合軍の進駐せざる中部「スマトラ」の警備を擔任し現地機関を活用し「治安確保」を任す 昭和二年末より同二年年初頭に互に「インドネシア」の独立軍動勢悪化し日本軍將兵中其兇刃に斃るもの十數名を算するに至れども軍の断叫はる所態により「インドネシア」側は遂次平靜協調的となり

独立歩兵第百四十二大隊部隊略歴

年月日	概 要
昭和五一年八月	軍令陸甲オ一〇ス号並陸並機密カ四五十号に依り、独立歩兵オ一四二大隊編成完結 編成地、スマトラ、シメラエル、島 編成員、六三一人 編成時、不足人員不明 昭一八年徵集現役兵及補充人員等、將校以下二五〇名（概算）到着す タバヌリ、州、ンボルガレに転進、同日現地徵集現役兵一七名入隊す ランパン、州、テルクバトシに転進 以降（終戦後） 南都防犯隊、上田少佐以下三六一人 軍留所オニ分所、関大尉以下二五名 並オニ五軍司令部所屬者（義勇軍指導要員）及入院患者にして所屬除復帰不能者并合計四四〇名転入す

- 108 -

0126

年 月 日	
概 要	昭 三 二 一 三 七 七 「パレンバン」州「ブンドツボ」に転出。同月二八日、岡大尉以下二三名転出す。 転属者、大部は終戦後復讐不能のため転属せしめられたるものとす。 「スマトラ」州「パレンバン」に出港。八月一日、大竹老入港上陸す。

-105-

0127